

# 若手教員が主体的に授業デザインを 開発していく研究会

学籍番号 169955  
氏名 栗生 義紀  
主指導教員 餅木 哲郎

## 1. 研究の背景

本校は、研究を責務とする研究校である。しかし、教員の実体としては、5年を最長とする人事交流によって、研究校経験年数の短い教員が増加してきている。近年では「学びに向かう力や人間性」「知識基盤社会」などの言葉が溢れ、知識の詰め込み教育、いわば指導主義の授業に警鐘が鳴らされているが、本校の授業実践では、未だにそのような授業が多くみられる。

そこで、本教育実践研究の目的を、若手教員の理論の理解が深まり、その理論を用いた若手教員の授業デザインが変容するための有効な手立てを見いだすこととした。

## 2. 研究Ⅰ—若手教員の授業実践の変容を目指した教員の理論の理解深化の促進—

### 2. 1 目的

研究校に配属になった若手教員の理論の理解深化が進み、若手教員の授業実践が変わることを目指す。そのために、理論を正しく理解して使えるように、若手への伝え方に着目して、『言葉だけでなく図や絵を用いて説明にあたる』『日常の中で理論的な言葉を用いていくこと』『自分自身の事例を話の話題として使える資料としてつくる』ことの3点のサポートの有効性を見いだすことを目的とする。

### 2. 2 方法

本年度3年目となる、報告者と同学年の若手教員2名に対して上記サポートを実施し、日常の発話やインタビュー、教師の立ち振る舞いの変化などをもとに、理解深化に変化が生じているかを分析し、有効性を確認する。

### 2. 3 結果

『言葉だけでなく図や絵を用いて説明にあたる』『日常の中で理論的な言葉を用いていくこと』『自分自身の事例を話の話題として使える資料としてつくる』の3点のサポートを行った。行ったのは、2016年9月～2016年12月の期間である。

上記サポート3点において、日常から言葉を使っていく中で適用場面が増え、自然と使えるようになっていた。また、同じ具体の授業モデルをもつ、図や絵で示すことで理論の見え方が深まった発言や態度が見られたことから、理論の深まりにおいて一定の効果が見られた。

## 2. 4 考察

このように、研究1において、若手教員の理解深化の援助として有効であったことを見いだせた。しかし、実際の授業を見ると、このアプローチが理論の理解につながることは見いだせたが、理論の理解を深めるだけでは、実践と結びついていかないこともわかった。

# 3. 研究Ⅱ—教員の主体性をあげる研究会

## 3. 1 目的

理論をトップダウンでおろしても、単なる「覚える（理解することがゴールの）理論」になることから、理論と実践が結びつくには、実践の中の理論が見えたり、理論を欲したりする状況が必要になると考えた。それは、やらされる研究では見えたり欲したりできず、研究することがおもしろく、没頭することを要する。そこで、自己原因性感覚に着目し、主体性をあげる研究会が、理論と実践がつながることに有効かどうかを明らかにすることを目的とした。

## 3. 2 方法

自己原因性感覚もてる「自分の課題から進める主体的な実践を行う」研究会を実施する。そして、自分の課題から実践を進めることが、理論と実践をつなげることに有効であったかをアンケートやインタビューを用いて検証する。

また、自己原因性感覚もてるファシリテーターの役割として見いだした「進行の仕方」「可視化していく」「資料を整理し、役割を事前にアナウンスする」「第3者の招集」を行い、アンケートやインタビューを用いて、その有効性を確認する。

## 3. 3 結果と考察

「教師自らの授業の課題を設定する」研究会を計10回行った。また、それにかかわり、資料作りや第3者の招集、ホワイトボードを用いた可視化、言い合える雰囲気や答え探しではないことを強調した進行を行った。

アンケートやインタビューにおいて、自分の実践の中で、理論を用いて説明できるようになったり、これまでの理論がどのような実践の様子を伝えようとしているのかが見えてきたという意見が多く聞かれた。この研究会が若手教員の理論と実践を結びつかせ、理論を獲得し、授業実践が変容していくことに有効であることを見いだせた。ファシリテートとしては、進行の仕方、第3者の招集が自己原因性感覚をもつことに深くかかわることも示すことができた。

# 4. 成果と課題

自分の課題から進める主体的な実践を行う研究会を通して、理論と実践が結びついていくことを見いだせた。研究校に所属する若手教員が、これからの社会を念頭に置いた授業観を理論として獲得し、授業実践が変容するための研究会の在り方を示せたということである。

その汎用性については今後の課題であり、組織の人数やファシリテートしていくリーダーの能力育成、第3者の招集の仕方などについて、さらに検討していく余地がある。